

一話 題一

チクングニア熱

日本医科大学成田国際空港クリニック

赤沼 雅彦

日本医科大学成田国際空港クリニックでは成田空港検疫所から委託を受け、平成 22 年 5 月から黄熱ワクチン接種を実施している。さらに平成 22 年 12 月 1 日からマラリア、デング熱及びチクングニア熱（平成 23 年 2 月 1 日から検疫法改正により追加）の流行地域からの帰国者又は入国者で、発熱のあるこれら検疫感染症疑い患者の採血とマラリア迅速診断キットによる判定を実施している。今回はチクングニア熱について概説し、当クリニックで経験した症例を提示する。

疾患の経緯と疫学

チクングニア熱は蚊に吸血されることによってチクングニアウイルスがヒトへ感染する急性熱性疾患であり、ヒト→蚊→ヒトの感染環を形成する。1952～1953 年の流行時にタンザニアで熱性疾患患者から初めてチクングニアウイルスが分離されて以来、チクングニア熱はサハラ以南のアフリカ、南アジア、東南アジアで地域的に流行してきた。2004 年以降ケニア沿岸およびインド洋南西諸島でチクングニア熱が再興し、推定 500,000 人の患者が報告された。さらにチクングニア熱の流行はインドに波及し、2005 年以来 140 万人の症例が報告されている。現在スリランカ、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシア、ミャンマー等に流行が拡大し、現在も継続している¹⁾。イタリア北東部では 2007 年 7～9 月の間に 205 人（死者 1 人）の患者が報告され、フランス南東部では 2010 年 9 月に相次いで 2 例の国内発生例が報告されている。イタリアの流行ではヒトスジシマカからチクングニアウイルス遺伝子が検出されたため、この蚊によって媒介されたことが証明されている。日本国内にはデングウイルス、チクングニアウイルス両方を媒介するヒトスジシマカが生息しており、その分布北限は東北北部であるためチクングニア熱が流行する可能性は否定できない²⁾。

臨床症状、診断、治療等

潜伏期間は 2～12 日で、患者の大多数はチクングニア熱と呼ばれる急性熱性疾患の症状を示す。発症すると発熱、関節痛は必発であり、発疹は八割程度に認められる。関節痛は四肢遠位に強く対称性である。その他の症状として全身倦怠、リンパ節腫脹、頭痛、筋肉痛がある。また出血傾向（鼻出血・歯肉出血）や悪心・嘔吐、末梢リンパ節症、羞明、無力症をきたすこともある¹⁾。主な検査所見はリンパ球減少と血小板減少であり、AST、ALT の上昇もみられる。チクングニア熱はデング熱と臨床的に鑑別が難しく、アフリカ、アジアにおける分布域もほぼ一致するため、

確定診断には RT-PCR によるウイルス遺伝子の検出と血清学的検査（IgM 抗体の検出）等が必要となる。特異的治療法は存在せず対症療法のみである。急性期は血中ウイルス濃度が非常に高く吸血した蚊が感染蚊となる可能性は高いので、感染環を成立させないために患者が媒介蚊に刺されないように注意する必要がある。これらをふまえ平成 23 年 2 月 1 日付けで「感染症の予防および感染症の患者に対する医療に関する法律」で 4 類感染症全数把握疾患に指定され、同時に検疫法においても検疫対象疾患として指定された。

症 例

当クリニックで経験した症例は、平成 21 年 9 月 11 日インドネシアの農村部に約 2 カ月間滞り後帰国した 35 歳 NPO 職員の男性であった。帰国前夜から発熱と頭痛があり、成田到着後検疫所で申告し、マラリア及びデング熱の迅速検査は陰性で、白血球 7,500/μL、血小板 17.2 万/μL、CRP 0.4 mg/dL。当クリニックを紹介され受診した。来院時、熱感、食思不振、頭痛を訴えた。マラリア罹患治療歴があった（平成 21 年 3 月）。体温 39.4℃、その他身体所見に明らかな異常はなく、補液と解熱剤投与で経過観察した。迅速インフルエンザ診断検査は陰性。1,000 mL の補液終了直前に再度血液検査実施し、白血球 6,000/μL、血小板 18.8 万/μL、CRP 1.4 mg/dL、AST 21 U/L、ALT 30 U/L、LDH 212 U/L、Na/K/Cl 135/3.3/101 mEq/L であった。この間発汗解熱があり体幹に直径 2 から 5 mm の不整形の発疹が認められたため感染性熱性疾患を疑った。解熱剤（アミノアセトフェン 400 mg 頓用）を処方するとともに、自宅近郊の感染症科受診を勧め帰宅とした。翌日 9 月 12 日東京都立墨東病院感染症科を受診し入院となり、血液からチクングニアウイルス遺伝子が検出されチクングニア熱と診断された。経過良好で 9 月 16 日退院となった（都立墨東病院担当医よりの経過報告による）。以上、当クリニックでのチクングニア熱症例である。日本においては平成 18 年末～平成 23 年 1 月までに 19 例のチクングニア熱輸入症例が報告されている。

ま と め

国内流行を危惧して検疫感染症に本年 2 月に新たに指定されたチクングニア熱について概説と当クリニックでの経験症例を提示した。

文 献

1. 国立感染症研究所感染症情報センター：病原微生物検出情報月報 2011; 32: 161-162.
2. 国立感染症研究所感染症情報センター：病原微生物検出情報月報 2011; 32: 159-160.

(受付：2011 年 9 月 9 日)

(受理：2011 年 9 月 20 日)